

花ちゃん、オー君、モンタ博士のわくわくドキドキ冒険記2

国立市立国立第七小学校

平成26年5月30日 NO.20 (120)



花ちゃん 「うわあー！へんな黒い虫（むし）がいる。」

オー君 「なーんだ。ハサミムシだよ。」

花ちゃん 「え！はさまれちゃうの。わたし、いたいのきらい。わたしね、ダンゴムシに興味（きょうみ）をもって、いろいろな調（しら）べてみようと思って、あれこれひっくりかえしてたの。」

オー君 「ふーん。そうなんだ。ハサミムシって、ふつうの虫とちがうよね。」

花ちゃん 「何がどうちがうの。」

オー君 「ふつう、虫って前足とか口ばしではさむよね。こいつは、おしりのハサミではさむんだ。ハサミムシって、かわったやつなんだ。」

モンタ博士「そのとおりだね。ハサミムシのハサミは、ゴキブリなど古い昆虫に見られる長くのびた2本の尾毛（びもう）が発達（はったつ）したものなのさ。」

花ちゃん 「そうなんですか。ところで、ハサミは、どんなときに使（つか）うのですか。」

モンタ博士「ダンゴムシやイモムシなどのエサをつかんだり、ハサミをふりかざして敵（てき）から守（まも）るようになっているのさ。とこで、ここで問題（もんだい）だ。石をどけたりすると、ハサミムシがあっちこっちに動（うご）くけど、じっとしていることがあるんだけど、それはどういう時（とき）でしょうか。」

花ちゃん 「ふーむ。難（むず）しいですね。」

オー君 「ひょっとして、卵（たまご）をうんでいるときとか？」

モンタ博士 「ピンポン。その通（とお）り。ハサミムシは、卵をうむとおおいかぶさる
ように卵を守るのさ。カビがはえないように一つ一つなめたり、空気（くう
き）にふれさせるために、動（うご）かしたりしているのさ。」

花ちゃん 「へえー！ハサミムシのお母さんって、とってもえらいんですね。」

モンタ博士 「さらに、卵がかえるまでは、そばをはなれず、エサも取（と）らず、飲（の）
まず食（く）わずで世話（せわ）をするのさ。」

オー君 「すごくえらいお母さんだなあ。」

モンタ博士 「卵から幼虫（ようちゅう）になっても、まだ終（お）わないんだ。」

花ちゃん 「え！お母さんのお仕事（しごと）は、まだあるんですか。」

モンタ博士 「生まれたばかりの幼虫は、自分（じぶん）ではエサをとることができないだ
ろう。では、どうするんだと思う。」

オー君 「うーん。難しいなあ。おいらにはわかんないです。」

花ちゃん 「わたしも、まったくちんぷんかんぷんです。」

モンタ博士 「あのね、おどろかないでね。ハサミムシのお母さんはね、生まれたばかりの
幼虫のために、自分の体（からだ）をなげだすんだよ。」

花ちゃん 「え！ほんとうですか。すごいですね。」

オー君 「そうか。幼虫だって何かを食べなければ死んでしまうなあ。それじゃ、
何のために苦労（くろう）して卵を育（そだ）ててきたのかわからない。」

モンタ博士 「ハサミムシのお母さんだって、その場（ば）からはなれることだってできる
はずなのに。それをしないで、自分が食べられることを待（ま）っているんだ。」

花ちゃん 「ハサミムシのお母さんって、すごいですね。」

モンタ博士 「やがて、ハサミムシの幼虫も大きくなったときに、おなじようにして自分の
子どもを育てるのですね。」

オー君 「そうやって、ハサミムシは、つぎの世代（せだい）へと命（いのち）のバト
ンタッチをしていくのですね。」